

スキー場からあるいは 索道からのアイデア

素人の視点からあるいは法学の視点から

松村良之 Yoshiyuki MATSUMURA



北海道大学名誉教授
明治大学研究・知財戦略機構客員研究員

私は北海道大学に約30年勤務した。仕事の合間にスキーを楽しみ、道内の多くのスキー場に行った。たぶん、80年代だと思うがスキー場の革命的变化(格段に快適になった)と思ったのが、高速ゴンドラ、高速リフトの導入である(ちなみに、スキーに詳しくない読者に説明すると、搬器が乗降場で索条を解放し、乗降時に低速となり—それゆえリフトについてはデタッチャブルリフトと言われる—、それ以外では高速で運行されるゴンドラ、リフトである。したがって、ゴンドラも観光地によくあるロープウェイのような交走式ではなく、たくさんの搬器が索道に取り付けられ循環している。通常、リフトで一つの搬器の定員が2~4名、ゴンドラが4~8名である)。それ以前の固定循環式のリフト(体感スピードはエスカレーターのスピードと同じ)とは異なり格段に高速であり、便利で、スキーが快適なものになった。

それで感じたのが、上記のアイデアと技術の都市交通への応用である。まず、アイデアの応用で言えば、通常は高速運行し、乗降時のみ低速になるというアイデアである(アイデアという言葉を使うのは、以下で述べる例は技術的には、デタッチャブルリフトとは大きく異なり、また技術的難度も高いと思われるからである)。すぐ思いつくのは、エスカレーター(歩く歩道を含む)であろう。近年出来た地下鉄は深いところを走行しているので、乗り換えとかホームと地上の移動に非常に時間がかかる。地上に出るまでにエスカレーターに10分以上乗っている感じである。これが乗降時のみ低速になり(いまのエスカレーターのスピード)、それ以外は比較的高速のエスカレーターができれば大変便利に思われる。たぶん、技術開発は行われ

ているのであろう。あるいは、コストを含めて、技術的には可能だが、安全上あるいはその他の理由で実用化されていないのかもしれない。でも、移動手段としてこのようなものがあれば大変便利に思われる(ちなみに、これに対し、デタッチャブルリフトからのアイデアの借用として、現在のエスカレーターは、2人が上限の幅になっているが、4人と6人が並列に利用できるというものもあるかもしれない。でも真ん中に立つと手すりがないから、安全上受け入れられないであろう)。

もう一つは、ゴンドラリフトの都市交通への応用である(輸送能力、コストの問題があるからメジャーな輸送手段とはなり得ないだろう)。ウィキペディアによると、テムズ川横断用のゴンドラリフトが実用化されているようである(エミレーツ航空が出資し、2012年に運行開始。事業の採算などは不明)。法的な問題を言えば、これは索道事業であり、日本では索道事業は鉄道事業法の規制下にある。どういうふうに規制されているのかは知らないが、過剰に一律に規制している部分もあるであろう。都市の移動手段として、ゴンドラリフトもありうるのではないかとと思われるがいかがであろう。

法的な観点からは、この種のものは一律に規制するのではなく(そうすると規制は厳しいほうに傾きがちである)、その個別性に応じて、安全の観点から規制するということであろう。

1975年から2006年まで北海道大学法学部(大学院法学研究科)助教、教授。その後千葉大学法経学部(大学院人文社会科学研究科)教授。2012年定年退職。専門は法社会学。(顧問/1989年会員就任)